

# 日本宋代文學學會 第8回大会プログラム

2021年11月27日(土) 13:00～17:00

Zoomオンライン形式

13:00 会長あいさつ 東 英寿

## I 研究発表 13:10～14:15

①13:10-13:40 藍 莫雅 (大阪大学大学院)

「後死」について ——白居易・陸游を中心に——

司会 甲斐 雄一 (明治大学)

②13:45-14:15 早川 太基 (神戸大学)

宋代哲學と琴學 ——『漁樵問對』と琴曲「漁樵問答」

司会 明木 茂夫 (中京大学)

## II 第6回唐宋八大家シンポジウム 14:30～16:15

JSPS科研費「唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究」主催/  
日本宋代文学学会共催

司会 副島 一郎 (同志社大学)

①14:35-14:55 山本 嘉孝 (国文学研究資料館)

近世日本における蘇轍「上樞密韓太尉書」受容  
——室鳩巢と頼山陽を中心に

②15:00-15:20 内山 精也 (早稲田大学)

北宋太守の文学 ——蘇軾の密・徐知州時代における文と詩詞

③15:25-15:45 東 英寿 (九州大学)、久保山 哲二 (学習院大学)

唐宋八大家古文の計量分析的考察 ——序・記・論の虚詞分析

④16:00-16:15 総合討論

## III 総会 16:30～17:00

## 発表提要

### I-① 「後死」について ―白居易・陸游を中心に―

大阪大学大学院文学研究科修士課程 藍 莫雅

老いは誰しも避けられぬ人生最大の課題の一つである。中国古典詩においても、自らの老いとそれに伴う身体的・精神的変化は様々な形で表現されてきた。ここで特に注目してみたいのは、年老いて知友に先立たれ、死に後れた詩人が、如何に老いの現実と向き合い、それを表現したかについてである。この種の表現、すなわち「後死」表現を数多く生み出した代表的な詩人が、どちらも長寿を誇る白居易と陸游であった。

本発表では、白居易と陸游の詩における「後死」表現を比較しながら、友に先立たれて一人で生き残ることに伴う孤独感・喪失感が年齢を重ねるとともにどのように変化したのか、死者との交往の記憶はどのように書き記されたのか、そして自らの老いに対して最終的にどのような態度が示されるに至ったのかなどの諸点を明らかにしたい。

### I-② 宋代哲學と琴學 ―『漁樵問對』と琴曲「漁樵問答」

神戸大学文学部 早川 太基

宋代哲學と琴學との関連性について、哲學書『漁樵問對』（『漁樵問答』）と琴曲「漁樵問答」をテーマとして検討する。まず(一)『漁樵問對』の名稱・作者・内容評價などの問題を整理して當時の影響度に説きおよぶ。(二)『漁樵問對』の内容は、天地萬物の理を説いて人間論・存在論に結びつけており、宋代哲學の傾向がよく表われる。つぎに(三)琴曲「漁樵問答」の初出は明代の琴譜であるが、資料的発見によって、曲の成立は南宋以前に遡れると判明した。以上の分析を受け、最後に(四)宋代の琴曲「漁樵問答」の意境と『漁樵問對』との関連性について検討し、哲學的思索・精神的交流・山水の風景などの各種の要素が、一曲のなかに一體化したイメージとして繰り広げられると結論づける。同時に、このような哲學を背景として有すればこそ、琴曲「漁樵問答」でも如何なる「問答」を奏で、そして聴き取れるかが、曲としての魅力・面白味であることを提唱する。

## 第6回唐宋八大家シンポジウム

JSPS科研費研究班主催の唐宋八大家シンポジウムは、今回で第6回となります。第1回、2回目シンポジウムでの発表論文は『唐宋八大家の世界』、第3回、4回目は『唐宋八大家の諸相』、第5回目は『唐宋八大家の探究』（いずれも花書院）にそれぞれ収録されています（在庫あり、必要な方は東までご連絡下さい）。今回のシンポジウムでは、近世日本における蘇轍の受容、蘇軾の密州、徐州時代、唐宋八大家古文の計量分析というように、唐宋八大家について様々な視点からの発表を行います。

### II-① 近世日本における蘇轍「上樞密韓太尉書」受容 —室鳩巢と頼山陽を中心に—

国文学研究資料館 山本 嘉孝

唐宋古文を規範とした近世後期日本の漢文作者たちが、古文作者の「神氣」に学ぶことを理想としたことは、以前に指摘した。しかし、文に漲る「氣」がどのような性質を持つかについては、捉え方が一様ではなかった。

本発表では、江戸時代中期と後期をそれぞれ代表する經世家かつ漢文作者であった室鳩巢（1658～1734）と頼山陽（1780～1832）の二者が、孟子と司馬遷における「氣」と「文」の連關を指摘する蘇轍「上樞密韓太尉書」をどのように解釋したかを比較する。蘇轍のこの篇に登場する「氣」を、鳩巢が「豪壯」なものとして把握したのに対して、山陽は「靜恬」・「澹泊」な姿勢と共存するものとして理解した。この相違が、鳩巢・山陽の漢文作者としての自意識とどのように關わるものであったといえるのか、二者が日本の史實について漢文で記した『赤穂義人録』と『日本外史』に垣間見ることのできる作者意識を比較しながら考察する。

### II-② 北宋太守の文学 —蘇軾の密・徐知州時代における文と詩詞—

早稲田大学教育・総合科学学術院 内山 精也

北宋 150 年間の文学史において、翰林学士が果たした役割は極めて大きい。そ

して、北宋において翰林学士に除された士大夫は 200 名余、その初任の平均年齢は 47.9 歳であった。蘇軾(1037-1101)が翰林学士に除せられたのは元祐元年(1086)、51 歳のこと、夙成の天才にしてはかなり遅く、北宋の平均よりも 3 年遅い。むろんこの遅れは、烏台詩案とそれにつづく黄州安置時代の約五年に亘る政治的空白期があったからにはほかならない。かりに新法・旧法の党争がなかったならば、年齢的にも実績的にも、蘇軾は密・徐知州時代の前後に翰林学士に選任されていて決しておかしくはなかった。本発表では、密・徐知州時代における蘇軾の文章に着目し、彼が文壇の求心力を一気に高めていた実態を垣間見る。併せて、文章多産の態勢と詩詞のそれとの根本的相違、すなわち士大夫にとっての文とは何かという問題についても考えてみたい。

## II-③ 唐宋八大家古文の計量分析的考察 一序・記・論の虚詞分析一

九州大学比較社会文化研究院 東 英寿  
学習院大学人文科学研究科 久保山 哲二

本発表は、計量分析の手法を用いて、唐宋八大家の文体を考察することを目的とする。これまで、唐宋八大家個々の文章の特色については個別に論じられることはあったが、唐宋八大家全体を通して、文体の特色を明らかにしようとする方向の研究はなかった。そこで、本発表は、唐宋八大家の序、記、論の全ての文章を対象として、その虚詞の使用に着目して分析を行った。虚詞に着目したのは、実字と違って、それを使用しなくとも文意が変わらないので、そこに作者の文体の書き癖、特徴が表出しやすいと考えられるからである。本発表では、唐宋八大家の序、記、論の文章に使用されている虚詞について、Bootstrap 法を用いて分析し、唐宋八大家間の古文の類似やその関連性について提示したい。

以上